
変人達と僕×・・・調子に乗って暴走したから見ないで！

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変人達と僕×・・・調子に乗って暴走したから見ないで！

【Nコード】

N4388Q

【作者名】

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

【あらすじ】

はい。作者の魂魄さんがキャラだけは貸してくれるというので（手は受験で忙しいそうで）、僕（も受験生）がやらせてもらいました。

簡単に言います。あっちの方のファンの人は見ない方が良いと思います。はい、ごめんなさい。

ついでに山も意味も落ちもありません。

何となくです。

（前書き）

はい。作者の魂魄さんがキャラだけは貸してくれるというので（手は受験で忙しいそうで。）、僕（も受験生）がやらせてもらいました。

正直言います、けっこうひどい作品になっています。

魂魄さん、これやっぱ魂魄さんが書いた方が良かったですかね……。

時間軸はご想像にお任せします。亜空間でも何でも。

ぶっちゃけ両方とも舞台は同じような町だし時代は変わらないし

（一応両方のキャラ紹介）

・調子に乗って暴走したから見ないで！

春風凜 小学生

ヤンデレのロリ幼女。だが幼いだけあってそんなに病んではない。

黒藤謙太 中学生

ヘタレ中学生。口先と正義感は一丁前。現実には押しつぶされやすいタイプ。

・変人達と僕（あったものを一部抜き出し）

篠原彩子（文中ではアヤコ） 高校生

重度のヤンデレ。薬局で売っている薬品を調査して新しいクスリを作るのが得意。

キスケを自分のものにするためにはどんな犠牲も厭わない、がセオリーの危険人物。

才原喜助 高校生

ツツコミ役。本編では空手を使ってかなり格好いいのだが今作ではただの人役に……。

正直、書くのが難しいから大して動けなかったキャラ。

コラボって難しいですね。

ってーかもーちょっといけたかもしれない。

はい……。すみませんOTL

注意）キャラ崩壊の危険性アリです

みなさんは、闘いというモノを見たことがありますか？

今日は、そんな闘いのお話です……。

ってあれ？ 俺ってこんなしゃべり方だっけ？

……そうだ、今日知り合った友達の口調が移ったんだ。

その友達と今日は鍋を囲んでいる。今日は銘那と來未の二人が他へ泊まっているので、丁度二人分材料が余っていたのだ。それで、親交を深めるついでに家に呼んだのだが……。

「凜ちゃん、この黒い豆腐食べない？」

この茶色でポニーテールの少女は篠原彩子というらしい。

どうもウチの凜とそりが合わないらしく……

「死ね」

「身体にいいよ？ 食べないの？」

「死ね。頼むから死んで……、って煙出てる！？ 怖いちょっとそれは本気で勘弁してお願い！」

相変わらず険悪なムードだ。

はつきり言って現在”も”修羅場である。

「さすがに今日会ったばかりにそんな暴言はない。たとえ相手が煙を出している豆腐を差し出してきても」

呆れたように呟くと、隣から声がした。

「いや、僕はその娘に会った瞬間告白されたからね？」

俺の隣に座っている優しそうな顔の男子は才原喜助と名乗っていた。

まあ、両方とも滅多にないシチュエーションだけだね。

「喜助君とワタシはずっとずっと前から運命の糸で繋がっていたの。アンタみたいになだ惚れただけじゃないよ？」

……どうも二人は犬猿の仲のようだ。

「別に運命とか信じないもん！ もう死ねばいいのに……」

「こらこら、さすがに死ねは言い過ぎだ」

俺は、凜をなだめながら、どうしてこうなったのかを思い出していた……。

「あ、包丁買うの忘れてた」

凜がこう言い出したのは今朝頃。今日は休日だというのに他の二人は出かけて二人きりなので、行ってみることにした。

まあ、凜一人で行かせても良かったのだが、今日発売のカードを買いたいのでついに行くことにした。

バスに乗り、ショッピングセンターに到着する。

店内に入って家庭用品コーナー側とカード売り場の二手に分かれた。

お目当ての物を手に入れ、しばらく店内を散策していたら丁度家庭用品コーナーに到着してしまった。

凜がいるかな？ と遊び半分で覗いてみたら、二人の少女が口論していた。

「謙太君を守るための包丁なの！ 絶対に渡さない！」

「そう、アナタも愛する人の為なのね……。でもワタシが喜助君に媚薬入りの夕飯を作るのに必要なの。だからワタシの物」

「媚薬って……、無理矢理振り向かせた恋に意味があるの!？」

「そうね、この包丁はワタシが買うべきだよね？」

「そう。これは私の物だよ！」

言葉のキャッチボールどころかドツチボールとなっている。

最早双方が聞く耳を持たず、口論ではない別の何かになっている。このまま放っておくのはお店に迷惑だと考え、凜を引きはがしてちよつと引きずる

「なーにやってんだ、凜」

「え？ あ、いや、争奪戦？」

凜はちよつと可愛くどきまぎしながら答えた。

「包丁ぐらい他の店でも買えるだろ？ ほら、行くぞ」

凜を引っ張りながら外へ出ようとすると、後ろから声がかかった。
「あ、あの、ありがとうございます」

振り返ると俺と同じかちょっと上の歳のような風貌の男子がこちらに駆け寄ってきていた。

その後ろには凜と口論していた茶髪の少女もついてきていた。

「あれ？ 俺お礼を言われるようなことは何一つしていませんよ？」

「いやいや、口論を止めてくれたから。アヤコは一回ああなると止まりにくいんだ」

アヤコと呼ばれた少女は覇気だか殺気だかをまとうているらしく、なぜかうつすらと黒いオーラが見えた。

そして彼女の睨んでいる先は……、案の定、凜であった。

しかも渡しておけばいいものをわざわざ引きずられながら精算までしたらしい、レジ袋を手に提げていた。

「さあ、その包丁を渡しなさい」

「嫌だ」

「いいじゃない？ 渡してくれたら彼を惚れさせるお薬あげるから」
「嫌だ」

「渡してくれないと……、溶かしちゃうわよ？」

なんだか人間には使ってはいけないような言葉を使っていたり、夜這いがされそうだったり色々怖いのでこの会話は聞かなかったことにしよう。話題をさっさと変えよう。そうだ、今日は鍋の材料が二人分余ってたはずだ。よし、夕食にでも誘えばこの場は切り抜けられる！

「あ、黒藤謙太です。よろしく」

「歳原喜助です。こちらこそ」

「あ、あの……、夕飯、一緒に食べませんか？ 材料が余ってるので」

「え！？ 何で急に？」

仕方が無いじゃないか、身の危険を感じる会話をこれ以上聞きたくない！

「いや……、その辺は何となく？」

「ここは逆に僕が夕飯誘う流れじゃないんですか!？」
こうして半ば強引に夕飯に誘ったのだった。

そして家に帰って、アヤコさんとあの少年をキッチンに招き、一緒に鍋を作った。

途中で何か入れられていたが……、まあ食べなければ大丈夫だろう。

本当に、この時間は嵐の前の静けさとも言つのか……、誰かが何かを企んでいる。そんな雰囲気であった。

そして鍋が完成、みんなで鍋を囲もう! となつた直後に冒頭に至る……。

「凜ちゃん、この黒い豆腐食べない？」

アヤコは見るからに怪しい黒い物体を箸でつまんで凜に差し出している

「死ね」

凜は見向きもせずに言った。

「身体にいいよ? 食べないの?」

と、アヤコが豆腐を近づけた時凜が急におびえだした。

「死ね。頼むから死んで……、って煙出てる!? 怖いちょっとそれは本気で勘弁してお願い!」

相変わらず険悪なムードだ。まあちよつとは和らいだとも言つておこう。

にしても、アヤコって娘、なかなか可愛いな……。

とにかく、凜の暴言だけはやめさせるべきだな。

「さすがに今日会ったばかりにそんな暴言はない。たとえ相手が煙を出している豆腐を差し出してきても」

「いや、僕はその娘に会った瞬間告白されたからね?」

若干意味の分からないボケをかます喜助はみんなスルーする。

「喜助君とワタシはずっとずっと前から運命の系で繋がっていたの。」

「アンタみたいになだ惚れただけじゃないよ？」

若干顔を赤らめながらアヤコは言う。

「別に運命とか信じないもん！ もう死ねばいいのに……」

「こらこら、さすがに死ねは言い過ぎだ」

「（ワタシ）私の愛を邪魔する奴は……、死ね」

「ハモった!？」

「ハモるな!」

凜とアヤコは見事にハモったが俺と喜助はハモれなかった……。悔しい。

「もっかいツツコミハモらせるぞ」

「張り合わなくて良いから!」

暴走しかける俺を喜助が止める。

その後は鍋に媚薬が入っていたり、アヤコと凜がバトルをしたりしただけで結局お開きになってしまった。

「また来て下さいね」

結局喜助さんとはツツコミについて意見交換しただけ。と何とも親父臭い会話で終わってしまった。

一方凜は……。

「べ、別にまた来て欲しいんじゃないからねっ!」

「あ、アンタの家なんかもう二度と行くものですか!」

両方ともツンデレになってしまった。

「ははは、二人ともツンデレになってるって。え、ツンデレ? あ

……。」

ツンデレ、というワードに喜助が反応して青ざめた。

どうも過去にツンデレ関連でトラウマがあったのだろう。

「頑張れよ! 喜助!」

喜助は青ざめた顔でこちらを振り返り、弱々しく頷いた。

「じゃ、じゃあまた」

「あ、待って喜助君!」

そう言っ て彼らは歩き出した。

「じゃーな」

「ばいばい」

俺たち二人は、彼らが見えなくなるまで子供のように手を振り続けた。

その後、気のせいかな遠くの方で喜助の悲鳴が聞こえたような気がした……。

（後書き）

魂魂さん、加筆or修正or修正という名の創作をしてください！

……嘘です。言い出しっぺの僕がちゃんとやります。

後に気付いたことで一つ。

謙太が喜助に敬語を使ってない！

……しかも喜助が優男になってるし。

すみませんm（――）m

つかさ、企画持ち出したのが12/27だぜ！？

俺遅いですねすみませんOTL

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4388q/>

変人達と僕×・・・調子に乗って暴走したから見ないで！

2011年1月26日23時40分発行